

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	古橋 祐
主な担当科目	アートマネジメント概論①,アートマネジメント概論Ⅰ,アートマネジメント概論②,アートマネジメント概論Ⅱ,音楽芸術環境研究Ⅱ,企画制作演習Ⅰ,企画制作演習Ⅱ,企画制作演習Ⅲ,芸術運営演習,芸術運営実習,芸術文化環境論,卒業研究,舞台芸術概論,音楽芸術運営特別演習①,音楽芸術運営特別演習②
シラバス	次ページをご参照ください
2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	2021年度は、新型コロナウイルスによるパンデミックの影響が、色濃く残る一年だった。しかし、それは今までの対面授業を前提とした教育法の功罪を含めた見直しを必要とする年でもあった。新たなIT機器やIT環境の導入とその効果を確認しながら、効果的な方法は積極的に取り入れ、新しい時代の大学教育について考えていきたい。
2022年の教育に関する自己評価	電子ブックの導入や、iPadの貸与など、新たな環境に対して積極的に取り組んだ。それは功罪半ばで、例えば、詳細な資料を電子データとして配布すると、せつかくの対面授業中もいつもスマホやタブレット、PCを見ていて、全く顔をあげない学生が多く見られた。確かに手元の資料の方が確実に見ることが可能である。しかし、実際に何を見ているのかは不明であるがそれを咎める理由がなくなってしまった。対面とデータの効果的な融合は、これからの時代の大きな課題である。
2022年のFD活動に関する自己評価	アートマネジメントの学内組織主査として、会議の中心となって、専任、非常勤を超えて教員間の情報の共有を図るように努力した。
授業改善のために取り入れた研修内容	多様な背景を持つ学生について、学内組織として学生の情報を共有し、その対処について1科目に限らず、学内組織として対応して行くようにした。

科目名－クラス名

アートマネジメント概論①

曜日時限

火 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
講義	1～	前期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
				0	30	0	20	50	100

教育到達目標と概要

この授業は、アートマネジメント、舞台芸術運営にたずさわる人間として必要な基礎的なアートマネジメントに関する知識、技能を修得することを目標とする。授業は、適宜、内容に即した本学教員を招いてお話いただくことがある。

この授業で修得した知識と技能は、後期「アートマネジメント概論Ⅱ」を受講するための基礎となる。

学修成果

音楽を中心とした舞台芸術とその置かれている状況についての知識を身に付けることができる。また、舞台芸術公演の現場におけるフロントスタッフとしての基礎技能を身に付けることができる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス（授業の進め方と概要）
第2回	アートマネジメントとは
第3回	劇場という名の舞台
第4回	アートマネジメントの歴史と特性
第5回	実習入門（1）：レセプションの仕事と心得（特別講師）
第6回	実習入門（2）：公演の流れと係員の行動（特別講師）
第7回	実習入門（3）：館内アナウンス・クローク対応（特別講師）
第8回	実習入門（4）：トラブル対応・避難誘導時の心構え（特別講師）
第9回	芸術文化と社会
第10回	芸術文化機関と関係組織
第11回	芸術文化の法的基盤①：文化芸術振興基本法、文化振興条例等
第12回	芸術文化の法的基盤②：劇場法、著作権法等
第13回	実演家および実演芸術団体のマネジメント（1） 実演家および実演芸術団体の活動の現状
第14回	実演家および実演芸術団体のマネジメント（2） プロフェッショナル・オーケストラの事例をもとに
第15回	実演家および実演芸術団体のマネジメント（3） 実演芸術団体の公演制作、マーケティング等について
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

今後必要となる基礎知識の習得であるので、真剣な態度で臨むこと。講師スケジュールの都合で、授業の順序・内容・教室等が変更になることがあるので、インフォメーションに注意すること。講義期間を通して、小テストとして複数回のレポート提出が求められる。

原則として、後期科目「アートマネジメント概論Ⅱ」を続けて履修することが望まれる。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

芸術全般に関する著作・資料を積極的に読んで授業に臨むことにより授業の理解が一層深まる。特に、学内外を問わず多くの生の演奏会、舞台に参加し、その芸術とともに制作者、スタッフの生の仕事に接することは重要である。

各回講義を振り返り関係する資料調査、文献調査に30分、課題に対する、資料調査、文献調査、レポート作成に90分程度を行うこと。

■ **教科書・参考書**

必要に応じてプリント配付、あるいは授業内で指示する。

参考書：小林真理・片山泰輔監修・編 三訂版『アーツ・マネジメント概論』（水曜社）：アートマネジメント概論Ⅱの履修するものは必ず購入すること。

科目名－クラス名

アートマネジメント概論①

曜日時限

火 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
講義	1～	前期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
				0	30	0	20	50	100

教育到達目標と概要

この授業は、アートマネジメント、舞台芸術運営にたずさわる人間として必要な基礎的なアートマネジメントに関する知識、技能を修得することを目標とする。授業は、適宜、内容に即した本学教員を招いてお話いただくことがある。

この授業で修得した知識と技能は、後期「アートマネジメント概論Ⅱ」を受講するための基礎となる。

学修成果

音楽を中心とした舞台芸術とその置かれている状況についての知識を身に付けることができる。また、舞台芸術公演の現場におけるフロントスタッフとしての基礎技能を身に付けることができる。

授業展開と内容

- 第1回 ガイダンス（授業の進め方と概要）
- 第2回 アートマネジメントとは
- 第3回 劇場という名の舞台
- 第4回 アートマネジメントの歴史と特性
- 第5回 実習入門（1）：レセプションの仕事と心得（特別講師）
- 第6回 実習入門（2）：公演の流れと係員の行動（特別講師）
- 第7回 実習入門（3）：館内アナウンス・クローク対応（特別講師）
- 第8回 実習入門（4）：トラブル対応・避難誘導時の心構え（特別講師）
- 第9回 芸術文化と社会
- 第10回 芸術文化機関と関係組織
- 第11回 芸術文化の法的基盤①：文化芸術振興基本法、文化振興条例等
- 第12回 芸術文化の法的基盤②：劇場法、著作権法等
- 第13回 実演家および実演芸術団体のマネジメント（1） 実演家および実演芸術団体の活動の現状
- 第14回 実演家および実演芸術団体のマネジメント（2） プロフェッショナル・オーケストラの事例をもとに
- 第15回 実演家および実演芸術団体のマネジメント（3） 実演芸術団体の公演制作、マーケティング等について
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回
- 第20回
- 第21回
- 第22回
- 第23回
- 第24回
- 第25回
- 第26回
- 第27回
- 第28回
- 第29回
- 第30回

履修上の注意

今後必要となる基礎知識の習得であるので、真剣な態度で臨むこと。講師スケジュールの都合で、授業の順序・内容・教室等が変更になることがあるので、インフォメーションに注意すること。講義期間を通して、小テストとして複数回のレポート提出が求められる。

原則として、後期科目「アートマネジメント概論Ⅱ」を続けて履修することが望まれる。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

芸術全般に関する著作・資料を積極的に読んで授業に臨むことにより授業の理解が一層深まる。特に、学内外を問わず多くの生の演奏会、舞台に参加し、その芸術とともに制作者、スタッフの生の仕事に接することは重要である。

各回講義を振り返り関係する資料調査、文献調査に30分、課題に対する、資料調査、文献調査、レポート作成に90分程度を行うこと。

教科書・参考書

必要に応じてプリント配付、あるいは授業内で指示する。

参考書：小林真理・片山泰輔監修・編 三訂版『アーツ・マネジメント概論』（水曜社）：アートマネジメント概論IIの履修するものは必ず購入すること。

科目名－クラス名

アートマネジメント概論Ⅰ

曜日時限

火 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
講義	1～	前期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
				0	30	0	20	50	100

教育到達目標と概要

この授業は、アートマネジメント、舞台芸術運営にたずさわる人間として必要な基礎的なアートマネジメントに関する知識、技能を修得することを目標とする。授業は、適宜、内容に即した本学教員を招いてお話いただくことがある。この授業で修得した知識と技能は、後期「アートマネジメント概論Ⅱ」を受講するための基礎となる。

学修成果

音楽を中心とした舞台芸術とその置かれている状況についての知識を身に付けることができる。また、舞台芸術公演の現場におけるフロントスタッフとしての基礎技能を身に付けることができる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス（授業の進め方と概要）
第2回	アートマネジメントとは
第3回	劇場という名の舞台
第4回	アートマネジメントの歴史と特性
第5回	実習入門（1）：レセプションの仕事と心得（特別講師）
第6回	実習入門（2）：公演の流れと係員の行動（特別講師）
第7回	実習入門（3）：館内アナウンス・クローク対応（特別講師）
第8回	実習入門（4）：トラブル対応・避難誘導時の心構え（特別講師）
第9回	芸術文化と社会
第10回	芸術文化機関と関係組織
第11回	芸術文化の法的基盤①：文化芸術振興基本法、文化振興条例等
第12回	芸術文化の法的基盤②：劇場法、著作権法等
第13回	実演家および実演芸術団体のマネジメント（1） 実演家および実演芸術団体の活動の現状
第14回	実演家および実演芸術団体のマネジメント（2） プロフェッショナル・オーケストラの事例をもとに
第15回	実演家および実演芸術団体のマネジメント（3） 実演芸術団体の公演制作、マーケティング等について
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

今後必要となる基礎知識の習得であるので、真剣な態度で臨むこと。講師スケジュールの都合で、授業の順序・内容・教室等が変更になることがあるので、インフォメーションに注意すること。講義期間を通して、小テストとして複数回のレポート提出が求められる。

原則として、後期科目「アートマネジメント概論Ⅱ」を続けて履修することが望まれる。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

芸術全般に関する著作・資料を積極的に読んで授業に臨むことにより授業の理解が一層深まる。特に、学内外を問わず多くの生の演奏会、舞台に参加し、その芸術とともに制作者、スタッフの生の仕事に接することは重要である。

各回講義を振り返り関係する資料調査、文献調査に30分、課題に対する、資料調査、文献調査、レポート作成に90分程度を行うこと。

■ **教科書・参考書**

必要に応じてプリント配付、あるいは授業内で指示する。

参考書：小林真理・片山泰輔監修・編 三訂版『アーツ・マネジメント概論』（水曜社）：アートマネジメント概論Ⅱの履修するものは必ず購入すること。

科目名－クラス名

アートマネジメント概論Ⅰ

曜日時限

火 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
講義	1～	前期	2	評価方法	0	30	0	20	50	100

教育到達目標と概要

この授業は、アートマネジメント、舞台芸術運営にたずさわる人間として必要な基礎的なアートマネジメントに関する知識、技能を修得することを目標とする。授業は、適宜、内容に即した本学教員を招いてお話いただくことがある。この授業で修得した知識と技能は、後期「アートマネジメント概論Ⅱ」を受講するための基礎となる。

学修成果

音楽を中心とした舞台芸術とその置かれている状況についての知識を身に付けることができる。また、舞台芸術公演の現場におけるフロントスタッフとしての基礎技能を身に付けることができる。

授業展開と内容

- 第1回 ガイダンス（授業の進め方と概要）
- 第2回 アートマネジメントとは
- 第3回 劇場という名の舞台
- 第4回 アートマネジメントの歴史と特性
- 第5回 実習入門（1）：レセプションの仕事と心得（特別講師）
- 第6回 実習入門（2）：公演の流れと係員の行動（特別講師）
- 第7回 実習入門（3）：館内アナウンス・クローク対応（特別講師）
- 第8回 実習入門（4）：トラブル対応・避難誘導時の心構え（特別講師）
- 第9回 芸術文化と社会
- 第10回 芸術文化機関と関係組織
- 第11回 芸術文化の法的基盤①：文化芸術振興基本法、文化振興条例等
- 第12回 芸術文化の法的基盤②：劇場法、著作権法等
- 第13回 実演家および実演芸術団体のマネジメント（1） 実演家および実演芸術団体の活動の現状
- 第14回 実演家および実演芸術団体のマネジメント（2） プロフェッショナル・オーケストラの事例をもとに
- 第15回 実演家および実演芸術団体のマネジメント（3） 実演芸術団体の公演制作、マーケティング等について
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回
- 第20回
- 第21回
- 第22回
- 第23回
- 第24回
- 第25回
- 第26回
- 第27回
- 第28回
- 第29回
- 第30回

履修上の注意

今後必要となる基礎知識の習得であるので、真剣な態度で臨むこと。講師スケジュールの都合で、授業の順序・内容・教室等が変更になることがあるので、インフォメーションに注意すること。講義期間を通して、小テストとして複数回のレポート提出が求められる。

原則として、後期科目「アートマネジメント概論Ⅱ」を続けて履修することが望まれる。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

芸術全般に関する著作・資料を積極的に読んで授業に臨むことにより授業の理解が一層深まる。特に、学内外を問わず多くの生の演奏会、舞台に参加し、その芸術とともに制作者、スタッフの生の仕事に接することは重要である。

各回講義を振り返り関係する資料調査、文献調査に30分、課題に対する、資料調査、文献調査、レポート作成に90分程度を行うこと。

■ **教科書・参考書**

必要に応じてプリント配付、あるいは授業内で指示する。

参考書：小林真理・片山泰輔監修・編 三訂版『アーツ・マネジメント概論』（水曜社）：アートマネジメント概論Ⅱの履修するものは必ず購入すること。

科目名－クラス名

アートマネジメント概論②

曜日時限

火 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
講義	1～	後期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
				60	30	0	10	0	100

教育到達目標と概要

アートマネジメントは、1990年代に日本に導入された比較的新しい分野の学問である。この授業ではアートマネジメントの歴史と現状について概観し、基礎的な知識を修得する。音楽を中心とする舞台芸術のマネジメントに焦点をあてながら、芸術と社会との関係性や、芸術文化への支援等について理解を深める。授業内ディスカッションやグループワークを通じて芸術文化に関わる問題意識をもつとともに、現代社会におけるアートマネジメントの役割について考察する。

学修成果

アートマネジメント概論①で学んだことをもとに、アートマネジメントの意義と実社会とのかかわりについて理解を深め、基礎的な知識を学ぶことができる。わが国における芸術文化をとりまく現状ならびに実演芸術団体や劇場・音楽堂の運営について理解し、把握することができ、今後の専門分野の学修における基礎となる。また、公演のフロント業務および企画書の作成の基礎的なスキルを身につけることができる。

授業展開と内容

- 第1回 劇場・音楽堂のマネジメント (1) わが国における劇場・音楽堂の歴史と現状
- 第2回 劇場・音楽堂のマネジメント (2) 公立の劇場・音楽堂等の事例をもとに芸術文化施設のマネジメント
- 第3回 劇場・音楽堂のマネジメント (3) 公立の劇場・音楽堂等による公演の企画制作、マーケティング等
- 第4回 劇場・音楽堂のマネジメント (4) 公立の劇場・音楽堂等を核としたまちづくり
- 第5回 フロント実習 (1)
- 第6回 実演芸術団体と劇場・音楽堂との連携： オーケストラ等の実演芸術団体と劇場・音楽堂等との連携によるマネジメントの現状について
- 第7回 芸術文化と支援 (1) 国、地方公共団体による公的支援について
- 第8回 芸術文化と支援 (2) 企業メセナ、アートNPO等の民間支援、ファンレイジングについて
- 第9回 国および芸術組織の教育普及活動
- 第10回 フロント実習 (2)
- 第11回 文化財法と文化財の活用によるまちづくり
- 第12回 フロント実習 (3)
- 第13回 企画案プレゼンテーション (1)
- 第14回 企画案プレゼンテーション (2)
- 第15回 総括
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回
- 第20回
- 第21回
- 第22回
- 第23回
- 第24回
- 第25回
- 第26回
- 第27回
- 第28回
- 第29回
- 第30回

履修上の注意

- ・資料配付が多いため、専用のファイルを作成すること。
- ・毎回の授業に教科書を持参すること

・授業を欠席した場合は、必ずクラスメートに連絡をとり、次回の授業までに課題や内容を把握しておくこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・授業内で指示する予習、課題を実施して授業に臨むこと。
 - ・新聞・雑誌などの文化芸術に関する記事にも、日頃から十分に目を通すよう心がけること。
 - ・授業において実施した課題（ミニレポート等）は、回収後、コメントによるフィードバックを事業内で行います。
-

■ 教科書・参考書

教科書：小林真理・片山泰輔監修・編 三訂版『アーツ・マネジメント概論』（水曜社）

参考書：松本茂章編著『はじまりのアートマネジメント』（水曜社）

科目名－クラス名

アートマネジメント概論②

曜日時限

火 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
講義	1～	後期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				60	30	0	10	0	

教育到達目標と概要

アートマネジメントは、1990年代に日本に導入された比較的新しい分野の学問である。この授業ではアートマネジメントの歴史と現状について概観し、基礎的な知識を修得する。音楽を中心とする舞台芸術のマネジメントに焦点をあてながら、芸術と社会との関係性や、芸術文化への支援等について理解を深める。授業内ディスカッションやグループワークを通じて芸術文化に関わる問題意識をもつとともに、現代社会におけるアートマネジメントの役割について考察する。

学修成果

アートマネジメント概論①で学んだことをもとに、アートマネジメントの意義と実社会とのかかわりについて理解を深め、基礎的な知識を学ぶことができる。わが国における芸術文化をとりまく現状ならびに実演芸術団体や劇場・音楽堂の運営について理解し、把握することができ、今後の専門分野の学修における基礎となる。また、公演のフロント業務および企画書の作成の基礎的なスキルを身につけることができる。

授業展開と内容

- 第1回 劇場・音楽堂のマネジメント (1) わが国における劇場・音楽堂の歴史と現状
- 第2回 劇場・音楽堂のマネジメント (2) 公立の劇場・音楽堂等の事例をもとに芸術文化施設のマネジメント
- 第3回 劇場・音楽堂のマネジメント (3) 公立の劇場・音楽堂等による公演の企画制作、マーケティング等
- 第4回 劇場・音楽堂のマネジメント (4) 公立の劇場・音楽堂等を核としたまちづくり
- 第5回 フロント実習 (1)
- 第6回 実演芸術団体と劇場・音楽堂との連携： オーケストラ等の実演芸術団体と劇場・音楽堂等との連携によるマネジメントの現状について
- 第7回 芸術文化と支援 (1) 国、地方公共団体による公的支援について
- 第8回 芸術文化と支援 (2) 企業メセナ、アートNPO等の民間支援、ファンレイジングについて
- 第9回 国および芸術組織の教育普及活動
- 第10回 フロント実習 (2)
- 第11回 文化財法と文化財の活用によるまちづくり
- 第12回 フロント実習 (3)
- 第13回 企画案プレゼンテーション (1)
- 第14回 企画案プレゼンテーション (2)
- 第15回 総括
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回
- 第20回
- 第21回
- 第22回
- 第23回
- 第24回
- 第25回
- 第26回
- 第27回
- 第28回
- 第29回
- 第30回

履修上の注意

- ・資料配付が多いため、専用のファイルを作成すること。
- ・毎回の授業に教科書を持参すること

・授業を欠席した場合は、必ずクラスメートに連絡をとり、次回の授業までに課題や内容を把握しておくこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・授業内で指示する予習、課題を実施して授業に臨むこと。
 - ・新聞・雑誌などの文化芸術に関する記事にも、日頃から十分に目を通すよう心がけること。
 - ・授業において実施した課題（ミニレポート等）は、回収後、コメントによるフィードバックを事業内で行います。
-

■ 教科書・参考書

教科書：小林真理・片山泰輔監修・編 三訂版『アーツ・マネジメント概論』（水曜社）

参考書：松本茂章編著『はじまりのアートマネジメント』（水曜社）

科目名－クラス名

アートマネジメント概論Ⅱ

曜日時限

火 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
講義	1～	後期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
				60	30	0	10	0	100

教育到達目標と概要

アートマネジメントは、1990年代に日本に導入された比較的新しい分野の学問である。この授業ではアートマネジメントの歴史と現状について概観し、基礎的な知識を修得する。音楽を中心とする舞台芸術のマネジメントに焦点をあてながら、芸術と社会との関係性や、芸術文化への支援等について理解を深める。授業内ディスカッションやグループワークを通じて芸術文化に関わる問題意識をもつとともに、現代社会におけるアートマネジメントの役割について考察する。

学修成果

アートマネジメント概論①で学んだことをもとに、アートマネジメントの意義と実社会とのかかわりについて理解を深め、基礎的な知識を学ぶことができる。わが国における芸術文化をとりまく現状ならびに実演芸術団体や劇場・音楽堂の運営について理解し、把握することができ、今後の専門分野の学修における基礎となる。また、公演のフロント業務および企画書の作成の基礎的なスキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	劇場・音楽堂のマネジメント (1)	わが国における劇場・音楽堂の歴史と現状
第2回	劇場・音楽堂のマネジメント (2)	公立の劇場・音楽堂等の事例をもとに芸術文化施設のマネジメント
第3回	劇場・音楽堂のマネジメント (3)	公立の劇場・音楽堂等による公演の企画制作、マーケティング等
第4回	劇場・音楽堂のマネジメント (4)	公立の劇場・音楽堂等を核としたまちづくり
第5回	フロント実習 (1)	
第6回	実演芸術団体と劇場・音楽堂との連携： オーケストラ等の実演芸術団体と劇場・音楽堂等との連携によるマネジメントの現状について	
第7回	芸術文化と支援 (1)	国、地方公共団体による公的支援について
第8回	芸術文化と支援 (2)	企業メセナ、アートNPO等の民間支援、ファンドレイジングについて
第9回	国および芸術組織の教育普及活動	
第10回	フロント実習 (2)	
第11回	文化財法と文化財の活用によるまちづくり	
第12回	フロント実習 (3)	
第13回	企画案プレゼンテーション (1)	
第14回	企画案プレゼンテーション (2)	
第15回	総括	
第16回		
第17回		
第18回		
第19回		
第20回		
第21回		
第22回		
第23回		
第24回		
第25回		
第26回		
第27回		
第28回		
第29回		
第30回		

履修上の注意

- ・資料配付が多いため、専用のファイルを作成すること。
- ・毎回の授業に教科書を持参すること

・授業を欠席した場合は、必ずクラスメートに連絡をとり、次回の授業までに課題や内容を把握しておくこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・授業内で指示する予習、課題を実施して授業に臨むこと。
 - ・新聞・雑誌などの文化芸術に関する記事にも、日頃から十分に目を通すよう心がけること。
 - ・授業において実施した課題（ミニレポート等）は、回収後、コメントによるフィードバックを事業内で行います。
-

■ 教科書・参考書

教科書：小林真理・片山泰輔監修・編 三訂版『アーツ・マネジメント概論』（水曜社）

参考書：松本茂章編著『はじまりのアートマネジメント』（水曜社）

科目名－クラス名

アートマネジメント概論Ⅱ

曜日時限

火 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
講義	1～	後期	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				60	30	0	10	0	

教育到達目標と概要

アートマネジメントは、1990年代に日本に導入された比較的新しい分野の学問である。この授業ではアートマネジメントの歴史と現状について概観し、基礎的な知識を修得する。音楽を中心とする舞台芸術のマネジメントに焦点をあてながら、芸術と社会との関係性や、芸術文化への支援等について理解を深める。授業内ディスカッションやグループワークを通じて芸術文化に関わる問題意識をもつとともに、現代社会におけるアートマネジメントの役割について考察する。

学修成果

アートマネジメント概論①で学んだことをもとに、アートマネジメントの意義と実社会とのかかわりについて理解を深め、基礎的な知識を学ぶことができる。わが国における芸術文化をとりまく現状ならびに実演芸術団体や劇場・音楽堂の運営について理解し、把握することができ、今後の専門分野の学修における基礎となる。また、公演のフロント業務および企画書の作成の基礎的なスキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	劇場・音楽堂のマネジメント (1)	わが国における劇場・音楽堂の歴史と現状
第2回	劇場・音楽堂のマネジメント (2)	公立の劇場・音楽堂等の事例をもとに芸術文化施設のマネジメント
第3回	劇場・音楽堂のマネジメント (3)	公立の劇場・音楽堂等による公演の企画制作、マーケティング等
第4回	劇場・音楽堂のマネジメント (4)	公立の劇場・音楽堂等を核としたまちづくり
第5回	フロント実習 (1)	
第6回	実演芸術団体と劇場・音楽堂との連携： オーケストラ等の実演芸術団体と劇場・音楽堂等との連携によるマネジメントの現状について	
第7回	芸術文化と支援 (1)	国、地方公共団体による公的支援について
第8回	芸術文化と支援 (2)	企業メセナ、アートNPO等の民間支援、ファンドレイジングについて
第9回	国および芸術組織の教育普及活動	
第10回	フロント実習 (2)	
第11回	文化財法と文化財の活用によるまちづくり	
第12回	フロント実習 (3)	
第13回	企画案プレゼンテーション (1)	
第14回	企画案プレゼンテーション (2)	
第15回	総括	
第16回		
第17回		
第18回		
第19回		
第20回		
第21回		
第22回		
第23回		
第24回		
第25回		
第26回		
第27回		
第28回		
第29回		
第30回		

履修上の注意

- ・資料配付が多いため、専用のファイルを作成すること。
- ・毎回の授業に教科書を持参すること

・授業を欠席した場合は、必ずクラスメートに連絡をとり、次回の授業までに課題や内容を把握しておくこと。

■授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・授業内で指示する予習、課題を実施して授業に臨むこと。
 - ・新聞・雑誌などの文化芸術に関する記事にも、日頃から十分に目を通すよう心がけること。
 - ・授業において実施した課題（ミニレポート等）は、回収後、コメントによるフィードバックを事業内で行います。
-

■教科書・参考書

教科書：小林真理・片山泰輔監修・編 三訂版『アーツ・マネジメント概論』（水曜社）

参考書：松本茂章編著『はじまりのアートマネジメント』（水曜社）

科目名－クラス名

音楽芸術環境研究 II

曜日時限

月 2時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	1～	前期	2	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

芸術をめぐる状況について検証する。特に、歴史的に劇場・ホールが置かれてきた状況を中心に、未来を見据えた芸術文化環境を考える。明治以降、特に戦後劇場が置かれてきた状況と歴史を、諸外国の例と比較しながら考察し、これからの公共ホールのあるべき姿とその意味を、芸術とテクノロジー、メディアとの関係など、新しいテーマを含め多角的に俯瞰しながら論じる。

学修成果

現代の芸術文化を取り巻く環境をハードウェアとソフトウェアの両面から体系的に捉える事により、自らの研究において社会における芸術の意味と表現について考えるための基礎を習得することができる。

授業展開と内容

第1回	はじめに
第2回	日本における芸術文化環境（1）：芸術文化環境の現在を俯瞰する（ソフトウェア）
第3回	日本における芸術文化環境（2）：芸術文化施設の現在を俯瞰する（ハードウェア）
第4回	日本における芸術文化環境（3）：芸術文化環境の問題点を抽出する（ソフトウェア）
第5回	日本における芸術文化環境（4）：芸術文化施設の問題点を抽出する（ハードウェア）
第6回	日本における芸術文化環境（5）：芸術文化施設の問題点の分析（ソフトウェア）
第7回	日本における芸術文化環境（6）：芸術文化施設の問題点の調査（ハードウェア）
第8回	日本における芸術文化環境（7）：ディスカッション
第9回	劇場の可能性（1）：舞台芸術の役割
第10回	劇場の可能性（2）：舞台芸術の可能性
第11回	劇場の可能性（3）：メディアと劇場空間
第12回	劇場の可能性（4）：テクノロジーと劇場空間
第13回	劇場の変化（1）：リノベーション
第14回	劇場の変化（2）：新しい芸術文化施設のかたち
第15回	講評とまとめ
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

舞台芸術のみならず、芸術とそれが置かれている環境について問題意識を持って、積極的に学ぶ姿勢が必要である。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習と復習にそれぞれ60分程度、資料調査、文献調査などを行うこと。
授業内で指示する課題を事前に調べておき発表できるようにしておくこと。

■ 教科書・参考書

必要に応じて指示する。

科目名－クラス名

企画制作演習Ⅰ

曜日時限

水 2時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	通年	2	評価割合	0	50	0	30	20	100

教育到達目標と概要

通年を通して、さまざまなコンサートの企画課題を通して、舞台芸術公演の企画・制作・運営・実施等の手法を学ぶ。自ら実際に企画書作成およびプレゼンテーションを行うことにより、企画力、プログラム構成力等を身につけていく。さらに、互いの企画案についてディスカッションを重ね、プロフェッショナルな企画とは何かを考える。最終的に次年度の「企画制作演習Ⅱ」における企画実施に向けた企画立案を行う。

この演習を通して、専門的な知識と表現力、また企画の推敲によって多文化・異文化に関する知識と理解、文化・社会と自然に関する知識と理解を身につけることができる。

学修成果

コンサートを中心とした企画制作に関する知識を知り、良い企画立案のための思考方法について理解することができる。

授業展開と内容

第1回	はじめに 授業の進め方
第2回	【企画①】 企画を成立させる要素とは／出題（第1課題）
第3回	【企画②】 企画を読む①
第4回	【企画②】 企画を読む②
第5回	第1課題① プレゼンテーションと講評①
第6回	第1課題② プレゼンテーションと講評②
第7回	【制作】 企画書の書き方①：企画主旨と概要、プログラム、出演者、収支計画、広報、営業、会計
第8回	【運営】 公演、終了後の業務／出題（第2課題）
第9回	第2課題① 関連講義／個別相談
第10回	第2課題② プレゼンテーションと講評①
第11回	第2課題③ プレゼンテーションと講評②／出題（第3課題）
第12回	第3課題① 関連講義／個別相談
第13回	第3課題② プレゼンテーションと講評①
第14回	第3課題③ プレゼンテーションと講評②／出題（第4課題）
第15回	第4課題① 関連講義／個別相談
第16回	第4課題② プレゼンテーションと講評①
第17回	第4課題③ プレゼンテーションと講評②／出題（第5課題）
第18回	第5課題① 個別相談
第19回	第5課題② プレゼンテーションと講評①
第20回	第5課題③ プレゼンテーションと講評②／出題（第6課題）
第21回	第6課題① 個別相談
第22回	第6課題② プレゼンテーションと講評①
第23回	第6課題③ プレゼンテーションと講評②／出題（第7課題）
第24回	第7課題① 個別相談
第25回	第7課題② プレゼンテーションと講評①
第26回	第7課題② プレゼンテーションと講評②／出題（第8課題）
第27回	第8課題① 個別相談
第28回	第8課題② プレゼンテーションと講評①
第29回	第8課題③ プレゼンテーションと講評②
第30回	まとめ

履修上の注意

授業への姿勢と積極的な発言を評価する。また、提出物等の期限を厳守すること。プレゼンテーションでは、参加者全員が他の企画について、授業内小テストとしてレポートの提出が求められる。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

企画の立案、企画書の作成は全て授業外で行われる。従って、さまざまなジャンルの公演にふれる機会をつくることに努め、常に、最新の音楽芸術の動向に注目、情報の入手、理解にも努めること。また、企画書作成、プレゼンテーションに必要となるパソコンスキルの向上に努めること。

企画課題についての情報収集と調査、企画の立案、報告書の作成に約3時間以上、課題毎に返却されるフィードバックの読み取り約30分程度が必要である。

教科書・参考書

必要に応じてプリント配付。あるいは授業内で指示。

科目名－クラス名

企画制作演習 II

曜日時限

水 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
演習	3～	通年	2		0	20	0	0	80	100

教育到達目標と概要

「企画制作演習 I」での学びをふまえて、学生自身によるコンサート・公演の企画制作を行う。芸術運営を実践として体験することにより、アートマネジメントの実態について学び、理解することを目的とする。これまでの学習や実習経験を土台として、「チーム・組織」としての行動、芸術運営へのかかわりが求められる。

学修成果

グループ・チームによるディスカッションを通じたアクティブラーニングの取り組みのもと、企画力やプログラム構成力、コミュニケーション能力を身につけ、概論や机上だけではなく実践的活動能力を養うことができる。また同時に、自己管理能力、チームワーク、リーダーシップや課題解決能力なども身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス 春休み中の進捗状況の共有（アルテリッカ公演）と本年度の進め方について
第2回	アルテリッカ制作会議①新組織の確認 企画相談①企画書（課題）提出について
第3回	アルテリッカ制作会議②準備状況の確認 企画相談②
第4回	アルテリッカ制作会議③準備状況の確認 企画相談③
第5回	企画案個別発表
第6回	第一次通過企画発表とグループ分け、企画ブラッシュアップ①
第7回	前年度自主企画公演の報告、アルテリッカ公演報告と報告書（案）提出、企画ブラッシュアップ②
第8回	企画グループプレゼンテーション
第9回	オフィシャル・プレゼンテーション
第10回	採択企画発表 組織について
第11回	公演に向けての準備 制作会議① 組織と役割分担の確認、アルテリッカ公演報告書最終版提出
第12回	公演に向けての準備 制作会議② 企画書の内容詰めと予算の確認
第13回	公演に向けての準備 制作会議③ 企画書および予算の確認
第14回	公演に向けての準備 制作会議④ チラシ・ポスターの検討
第15回	公演に向けての準備 制作会議⑤ 夏休み中の業務について
第16回	公演に向けての準備 制作会議⑥ 夏休みの活動報告と今後の計画
第17回	公演に向けての準備 制作会議⑦ 営業戦略
第18回	公演に向けての準備 制作会議⑧ 会計・チケット業務
第19回	公演に向けての準備 制作会議⑨ 学内外への宣伝広報（プレスリリース・DMなど）
第20回	公演に向けての準備 制作会議⑩ プログラム作成
第21回	公演に向けての準備 制作会議⑪ 当日体制・最終確認
第22回	公演の制作運営・実施（第2回公演）
第23回	第2回公演振り返り
第24回	公演に向けての準備 当日体制・最終確認（第3回公演）
第25回	公演の制作運営・実施（第3回公演）
第26回	第3回公演振り返り
第27回	報告書案第1稿の作成・提出
第28回	報告書案第2稿の確認
第29回	授業内報告会
第30回	授業まとめ

履修上の注意

・積極的な参加態度を歓迎する。授業やミーティングへの無断の遅刻・早退・欠席等は厳禁。・実際の制作運営にあたっては、挨拶はもちろんのこと、てきぱきとした行動とチームメンバーとの密なコミュニケーションが必要である。・個人およびグループの活動を週ごとにまとめた「活動記録ノート」の作成と提出を義務付ける。

<課題提出>企画書提出、実施報告書の提出 <授業内小テスト>授業の性格上、チームへの貢献度を重視する。活動への参画・主体性・組織への貢献度などに基づき評価を行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

・各チームからの報告や課題提示をもとに毎回の授業が進められるため、進捗状況や問題点の把握がスムーズに行われるよう、授業前の準備（課題の整理や関連資料の手配等）を充分におこなうこと（各回60分以上）。・毎回の授業にて、課題に対するフィードバックをおこない、ディスカッションに基づき意思決定と情報の共有をおこなう。

教科書・参考書

必要に応じてプリント配付。あるいは授業内で指示。

科目名－クラス名

企画制作演習Ⅲ

曜日時限

水 3時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
演習	4～	通年	2		0	20	0	0	80	100

教育到達目標と概要

「企画制作演習Ⅱ」の経験をふまえて、学生自身によるコンサート・公演の企画制作に主体的にかかわる。これまでの学修や実習・インターンシップ等の経験を土台として、チームに貢献するとともに、アートマネジメントの実態についてより深く学び、理解し、実践的活動能力を養うことを目的とする。より深い芸術運営へのかわりが求められる。

学修成果

グループ・チームによるディスカッションを通じたアクティブラーニングの取り組みのもと、プロジェクトや組織の全体を見通し、公演制作に主体的にかかわることで、目的達成のためのマネジメント能力を身につけ、さらに一歩進んだ企画力、リーダーシップ、自己管理能力、チームワーク、コミュニケーション能力、すぐれた課題解決能力を養うことが出来る。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス 春休み中の進捗状況の共有（アルテリッカ公演）と本年度の進め方について
第2回	アルテリッカ制作会議① 企画相談①企画書（課題）提出について
第3回	アルテリッカ制作会議② 企画相談②
第4回	アルテリッカ公演（第1回公演）振り返り 企画相談③
第5回	企画案個別発表
第6回	第一次通過企画発表とグループ分け、企画ブラッシュアップ①
第7回	前年度自主企画公演の報告、アルテリッカ公演報告と報告書（案）提出、企画ブラッシュアップ②
第8回	企画グループプレゼンテーション
第9回	オフィシャル・プレゼンテーション
第10回	採択企画発表 組織について
第11回	公演に向けての準備 制作会議① 組織と役割分担の確認、アルテリッカ公演報告書最終版提出
第12回	公演に向けての準備 制作会議② 企画書の内容詰めと予算の検討
第13回	公演に向けての準備 制作会議③ 企画書および予算の確認
第14回	公演に向けての準備 制作会議④ チラシ・ポスターの検討
第15回	公演に向けての準備 制作会議⑤ 夏休み中の業務について
第16回	公演に向けての準備 制作会議⑥ 夏休みの活動報告と今後の計画
第17回	公演に向けての準備 制作会議⑦ 営業戦略
第18回	公演に向けての準備 制作会議⑧ 会計・チケット業務
第19回	公演に向けての準備 制作会議⑨ 学内外への宣伝広報（プレスリリース・DMなど）
第20回	公演に向けての準備 制作会議⑩ プログラム作成
第21回	公演に向けての準備 制作会議⑪ 当身体制・最終確認
第22回	公演の制作運営・実施（第2回公演）
第23回	第2回公演振り返り
第24回	公演に向けての準備 当身体制・最終確認（第3回公演）
第25回	公演の制作運営・実施（第3回公演）
第26回	第3回公演振り返り
第27回	報告書案第1稿の作成・提出
第28回	報告書案第2稿の確認
第29回	授業内報告会
第30回	授業まとめ

履修上の注意

・積極的な参加態度を歓迎する。授業やミーティングへの無断の遅刻・早退・欠席等は厳禁。・実際の制作運営にあたっては、挨拶はもちろんのこと、てきぱきとした行動とチームメンバーとの密なコミュニケーションが必要である。・個人およびグループの活動を週ごとにまとめた「活動記録ノート」の作成と提出を義務付ける。

<課題提出>企画書提出、実施報告書の提出 <授業内小テスト>授業の性格上、チームへの貢献度を重視する。活動への参画・主体性・組織への貢献度などに基づき評価を行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

・各チームからの報告や課題提示をもとに毎回の授業が進められるため、進捗状況や問題点の把握がスムーズに行われるよう、授業前の準備（課題の整理や関連資料の手配等）を充分におこなうこと（各回60分以上）。・毎回の授業にて、課題に対するフィードバックをおこない、ディスカッションに基づき意思決定と情報の共有をおこなう。

教科書・参考書

必要に応じてプリント配付。あるいは授業内で指示。

科目名－クラス名

芸術運営演習

A

曜日時限

火 1時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	3～	通年	2	0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

翌年度の卒業研究・論文執筆に向けて、研究のテーマ・手法について知識と理解を深めることを目標とする。

ディスカッション等により論理的思考とプレゼンテーションの能力を養い、他の履修者と研究上の関心を共有する。

クラス毎に履修者の報告をもとにディスカッションをおこなうほか、他の履修者や上級生とグループ研究やフィールドワークなどをおこなうことがある。

履修者は年度末にまとめレポート（4,000字程度）を作成し提出するほか、報告会で各クラスの活動の概要と成果を報告する。これらにより成績評価をおこなう。

学修成果

- ・研究のテーマ・手法についての知識・理解を深め、論理的思考ができるようになる。
- ・効果的なプレゼンテーションと的確な文章表現ができるようになる。
- ・他者と協働し、スムーズなコミュニケーションができるようになる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス（全体）
第2回	関心ある研究課題について報告し、ディスカッションする
第3回	他の履修者の関心ある研究課題についての報告を聞き、ディスカッションする
第4回	関心ある研究課題について情報収集し、それにもとづきディスカッションする
第5回	他の履修者が収集した情報に関する報告を聞き、ディスカッションする
第6回	関心ある研究課題の周辺領域について情報収集し、それにもとづきディスカッションする
第7回	他の履修者が収集した周辺領域についての情報に関する報告を聞き、ディスカッションする
第8回	研究課題を絞り込み、それにもとづきディスカッションする
第9回	他の履修者が絞り込んだ研究課題についての報告を聞き、ディスカッションする
第10回	研究手法について報告し、ディスカッションする
第11回	他の履修者の研究手法についての報告を聞き、ディスカッションする
第12回	絞りこんだ課題・手法により文献調査を実施し、成果を報告、ディスカッションする
第13回	他の履修者の文献調査の成果の報告を聞き、ディスカッションする
第14回	研究課題・手法の見直しについてディスカッションする
第15回	前期の研究成果を報告し、夏休み中の研究計画についてディスカッションする
第16回	夏休み中の研究成果を報告し、ディスカッションする
第17回	他の履修者の夏休み中の研究成果の報告を聞き、ディスカッションする
第18回	後期の研究計画についてディスカッションする
第19回	研究計画に沿って、研究・フィールドワークを実施し、成果を報告、ディスカッションする
第20回	他の履修者の研究・フィールドワークの成果の報告を聞き、ディスカッションする
第21回	ここまでの研究成果をまとめて報告し、ディスカッションする
第22回	研究計画の見直しについて報告し、ディスカッションする
第23回	見直した研究計画に沿って、研究・フィールドワークを実施し、成果を報告、ディスカッションする
第24回	他の履修者の研究・フィールドワークの成果の報告を聞き、ディスカッションする
第25回	一年間の研究成果を報告し、ディスカッションする
第26回	他の履修者の一年間の研究成果の報告を聞き、ディスカッションする
第27回	レポートのテーマ、章立てについて報告し、ディスカッションする
第28回	レポートの内容について報告し、ディスカッションする
第29回	報告会に向けて準備する
第30回	報告会にて一年間の研究成果を報告する（詳細は別途指示する）

履修上の注意

- ・翌年度の卒業研究の基礎を固める科目であるので、履修者は主体的に取り組むこと。
- ・授業時間外での学修に十分な時間をかけること。
- ・担当教員と密に連絡をとり、参考書や調査対象等についてアドバイスを受けること。
- ・提出物等に関する通知・連絡に注意すること（締め切りを過ぎた提出物は受け付けない）。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・授業では、履修者による報告をもとにディスカッション（フィードバック）するので、授業時間外に各自の関心に応じて情報収集・整理などを進めて、報告の準備をすること（各回60分以上）。

教科書・参考書

参考書：外山滋比古『思考の整理学』（ちくま文庫、1986年）。酒井聡樹『これからレポート・卒論を書く若者のために』（共立出版、2007年）。小笠原喜康『新版 大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書、2009年）。その他、各自の研究テーマに応じて指示する。

科目名－クラス名

芸術運営実習

曜日時限

火 4時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
実技・実習	2～	通年	2	評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト
				評価割合	0	20	0	0	80
									100

教育到達目標と概要

「アートマネジメント概論」で学習したことを基に、学内の施設と公演を活用し、3年次以降につながる実習を行う。
 本学が企画・主催する公演の準備、制作、運営の現場を体験的に学ぶとともに、社会で通用するマナーや対応、技術を身につける。
 場合によっては、本学が企画制作協力をする公演事業にかかわる場合もある。
 また、実習に必要な知識を身につけるための講義も並行して行う。

学修成果

舞台芸術制作、及び公演運営の現場を体験的に学ぶことにより、舞台芸術公演制作の流れを理解し、公演スタッフとしてのスキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	講義	授業の位置づけと実施方法、制作の仕事
第2回	講義	制作・運営実習の流れ
第3回	講義	公演制作の仕事
第4回	実習	ユリホールでの公演（コンサート）の制作・運営①
第5回	実習と講義	劇場と緊急時対応について（テアトロ・ジューリオ・ショウワ、ユリホール）
第6回	実習	ウィンドシンフォニー定期演奏会の制作・運営
第7回	講義	スタッフの心構えとマナー
第8回	実習と講義	フロントスタッフの仕事
第9回	実習	ユリホールでの公演（コンサート）の制作・運営②
第10回	実習	ユリホールでの公演（トーク付のコンサート）の制作・運営
第11回	実習	室内合奏団の演奏会の制作・運営
第12回	講義	オペラの制作と運営について
第13回	実習	大学オペラ公演の制作①
第14回	実習	テアトロ・ジューリオ・ショウワオーケストラの演奏会の制作・運営
第15回	講義	これまでのふり返し、これからの予定
第16回	講義	後期実習への取り組みについて
第17回	実習	大学オペラ公演の制作②
第18回	実習	大学オペラ公演の運営計画立案・タイム計測（ゲネラルプローベ）
第19回	実習	大学オペラ公演の運営
第20回	実習	ユリホールでの公演（リサイタル形式のコンサート）の制作・運営
第21回	講義	オーケストラの企画制作・公演運営とマーケティング（特別講師）
第22回	実習	管弦楽定期演奏会の制作・運営
第23回	実習	メサイア演奏会の制作・運営
第24回	実習	ミュージカル・舞台スタッフ卒業公演の運営計画立案・タイム計測（ゲネラルプローベ）
第25回	実習	ミュージカル・舞台スタッフ卒業公演の運営
第26回	実習	学部バレエ卒業公演の運営計画立案・タイム計測（ゲネラルプローベ）
第27回	実習	学部バレエ卒業公演の運営
第28回	実習	短大バレエ卒業公演の運営計画立案・タイム計測（ゲネラルプローベ）
第29回	実習	短大バレエ卒業公演の運営
第30回	講義	これまでの実習のふり返し、まとめ

履修上の注意

「講義」では、積極的な参加姿勢を評価する。

「実習」では、制作現場での挨拶などの基本動作や積極的、主体的な行動、担当指導者への対応、グループでの協調性、コミュニケーション能力などを小テストとして評価する。

また、実習項目ごとに報告書（実習ノート）の提出が課題として義務付けられ、評価の対象となる。

授業予定は、現場の進捗状況によって変化するので注意すること。

ゲネラルブローベ見学は授業の一環としておこなうので、参加すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

実習開始以降は、授業外の時間を含め、何らかの形で実習に関係することになる。

各自のスケジュール管理もまた実習の一部であることを常に意識すること。

実習に向けて、公演の演目や出演者等について調べておくこと（合計30時間以上）。

各実習ならびに講義の際に反省会をおこなう。この時に学修成果に対するフィードバックをおこなう。また各回の実習記録（実習ノート）に対しても教員のコメントを付し、フィードバックする。

教科書・参考書

授業毎の資料配付など。

科目名－クラス名

芸術文化環境論

曜日時限

木 1時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	2～	通年	4	0	50	0	0	50	100

教育到達目標と概要

現代における芸術文化を取巻く環境は多種多様な展開を見せている。芸術文化を取巻く環境のなかでも大きな位置をしめている舞台芸術を中心とした芸術文化施設を取上げ、施設面に関する基礎的な知識の習得を目指す。前期ではまず現在の芸術文化施設の置かれている現状を把握し、施設と技術の概要を解説する。後期は劇場の歴史的な流れを解説する中で、これからの芸術文化環境のあり方について考えて行く。

授業では毎回必ず重要だと感じたキーワード、質疑、問題点提起の提出を求め、次回の授業にて解説、討論を行う。

学修成果

現代の芸術文化施設の成り立ちと、劇場空間の構成及び技術に関する専門的な基礎知識を習得することができる。

舞台芸術のための施設が生まれ発達してきた歴史的な流れを、舞台芸術の変化との関連の中で理解することによって、多文化・異文化に関する知識と理解が可能となる。

授業展開と内容

第1回	はじめに
第2回	総論：パフォーマンスと劇場
第3回	劇場ができるまで：企画編
第4回	劇場ができるまで：建設編
第5回	公共ホールの運営形態と劇場－1（直営、財団法人、指定管理者等）
第6回	公共ホールの運営形態と劇場－2（NPO法人、PFI等）
第7回	劇場の構成要素：運営・組織・施設
第8回	俳優vs観客：ステージの種類
第9回	演技をするための施設：舞台空間の構成と技術
第10回	鑑賞するための施設：客席空間の構成
第11回	舞台芸術を支援するための施設：舞台特殊設備（舞台機構1 床機構）
第12回	舞台芸術を支援するための施設：舞台特殊設備（舞台機構2 吊物機構）
第13回	舞台芸術を支援するための施設：舞台特殊設備（舞台照明・舞台音響）
第14回	舞台裏とサービス空間：パフォーマンススペースと公共スペース
第15回	現代の劇場を支える組織と技術・小テスト
第16回	劇場の歴史と文化・芸術
第17回	古代の劇場：パフォーマンス・スペースの誕生
第18回	中世の劇場－1：劇場なき劇空間
第19回	中世の劇場－2：シェークスピア劇場を中心に
第20回	ルネサンスの劇場：プロセニアムの誕生
第21回	バロックの劇場：バロックオペラハウスの成立
第22回	社会・都市・劇場：パリオペラ座を中心として
第23回	近代劇場の成立：パイロイト祝祭歌劇場を中心として
第24回	現代のオペラハウス－1：新国立劇場を中心として
第25回	現代のオペラハウス－2：現代劇場の諸相
第26回	建築音響計画入門
第27回	音楽のための空間：コンサートホールの成立と展開
第28回	日本的なる劇空間Ⅰ：江戸歌舞伎劇場をめぐって
第29回	日本的なる劇空間Ⅱ：近代から現代へ
第30回	課題の講評とまとめ

履修上の注意

授業の内容は全て体系的に関連しているため、まず出席することが重要である。

単位習得のためには、前期小テスト、及び、後期課題の提出が必須である。

原則として、前回授業の質疑、解説後に出席を取り、それ以降は遅刻として扱う。遅刻は2回を1回の欠席としてカウントする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

日頃からジャンルを問わず、舞台芸術はもちろんのこと、音楽・美術等芸術一般について興味を持って観ること。

その時に観客として「観る立場」だけでなく、「演ずる立場」「創る立場」に立って、スタッフ、観客などを観察すること。

配布されるレジメに基づいて、予習と復習にそれぞれ60分程度、資料調査、文献調査などを行うこと。

授業内小テストは採点后、返却、解答の解説を行う。

提出課題については、授業内にてコメントをフィードバックする。

教科書・参考書

授業内容に応じ、適宜資料を配付する。

参考図書：舞台技術の共通基礎 ～公演に携わるすべての人々に～ 劇場等演出空間運用基準協議会劇場

建築・文化史 S. ティドワース (著), 白川 宣力, 石川 敏男 (訳) 早稲田大学出版部

科目名－クラス名

卒業研究

C

曜日時限

火 2時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
演習	4～	通年	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

本科目ではこれまでの学修で身に着けた知識・理解や技能をもとに総合的な学修をおこない、問題発見・解決に必要な論理的・創造的思考力とプレゼンテーション能力を養うことを目標とする。

履修者は担当教員とのディスカッションにより研究のテーマ・手法・計画を決め、それに沿って研究を進める。

他のクラス・学年とのグループ・ディスカッションやフィールドワークなどをおこなうことがある。

学修成果

- ・研究のテーマ・手法についての知識・理解を深め、論理的思考ができるようになる。
- ・効果的なプレゼンテーション的的確な文章表現ができるようになる。
- ・問題発見・解決に必要な創造的思考力ができるようになる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス（全体）
第2回	問題意識についてディスカッションする
第3回	研究テーマについてディスカッションする
第4回	研究の手法についてディスカッションする
第5回	収集する資料、参照する先行研究の範囲についてディスカッションする
第6回	NDLサーチを用いて収集した資料・先行研究についてディスカッションする
第7回	CiNiiを用いて収集した資料・先行研究についてディスカッションする
第8回	その他のデジタル・アーカイブを用いて収集した資料・先行研究についてディスカッションする
第9回	先行研究から抽出できる課題を整理する
第10回	中間報告に向けて、より具体的な研究課題についてディスカッションする
第11回	中間報告に向けて、より具体的な研究手法についてディスカッションする
第12回	中間報告に向けて、先行研究のまとめ方についてディスカッションする
第13回	中間報告に向けて、論文の章立てについてディスカッションする
第14回	中間発表会の予行をおこなう
第15回	以後の研究計画についてディスカッションする
第16回	卒業論文の序論についてディスカッションする
第17回	卒業論文の第1章についてディスカッションする
第18回	卒業論文の第2章についてディスカッションする
第19回	卒業論文の第3章についてディスカッションする
第20回	卒業論文の結論についてディスカッションする
第21回	これまでに執筆した論文の改訂に向けてディスカッションする
第22回	改訂した第1章についてディスカッションする
第23回	改訂した第2章についてディスカッションする
第24回	改訂した第3章についてディスカッションする
第25回	改訂した結論についてディスカッションする
第26回	改訂した序論についてディスカッションする
第27回	注、参考文献、要旨についてディスカッションする
第28回	最終報告のスライドについてディスカッションする
第29回	最終報告の原稿についてディスカッションする
第30回	最終報告の予行をおこなう

履修上の注意

- ・学修の成果により評価する（卒業論文、要旨、発表・質疑応答については別途「卒業論文」にて評価する）。
- ・履修者は自らの関心に即して、主体的・計画的に取り組むこと。授業時間外での学修に十分な時間をかけること。担当教員と密に連絡をとり、参考書や調査対象等についてアドバイスを受けること。
- ・提出物等に関する通知・連絡に注意すること（締め切りを過ぎた提出物は受け取らない）。
- ・上記の授業展開は本論3章立てを想定して示したが、それに限るものではない。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・授業では、履修者による報告をもとにディスカッション（フィードバック）するので、授業時間外に文献調査やデータ収集・分析、考察などを進めて、報告の準備をすること（各回60分以上）。

教科書・参考書

アートマネジメントコース「卒業・修士論文作成の手引き」を配付する。

参考書は、酒井聡樹『これからレポート・卒論を書く若者のために』（共立出版、2007年）、小笠原喜康『新版 大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書、2009年）などの他、各自の研究テーマに応じて指示する。

科目名－クラス名

舞台芸術概論

曜日時限

木 2時限

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
講義	1～	通年	4		0	50	0	0	50	100

教育到達目標と概要

音楽や舞踊を主とする世界の舞台芸術を通して、芸術における創造の本質を理解する。芸術活動を目指すクリエイターたちは、制作運営上のスキルや演奏上のテクニックだけでなく、ジャンルを超えた幅広い作品知識と国際的視野に基づいた芸術的価値観、時代感覚、感性、美的センスが要求される。その目的に沿って、オペラ、バレエ、ミュージカル、サーカス、から歌舞伎まで、広範囲な音楽舞台芸術に関する基礎知識を学修する。

学修成果

アートマネジメント、舞台スタッフコースは勿論、音楽実技の履修者は、この授業を通して、多文化・異文化に関する知識と理解を深め、多くの舞台芸術の中での音楽の効果と役割を学び、その結果、演奏会と演奏家という音楽活動の範囲にとどまらない、職業としてのさまざまな音楽活動への展開につなげる知識とモチベーションを得ることが出来る。

授業展開と内容

第1回 授業ガイダンス・授業の目的と授業の進め方・講師プロフィール

第2回 コンテンポラリーアート概論Ⅰ：前衛と現代

第3回 コンテンポラリーアート概論Ⅱ：技術とアート

第4回 コンテンポラリーアート概論Ⅲ：価値の転換

第5回 ポピュラー音楽の世界Ⅰ：芸術音楽と大衆音楽

第6回 ポピュラー音楽の世界Ⅱ：POPであることの意味を考える（特別講師）

第7回 オペラの世界Ⅰ：世界のオペラ劇場

第8回 オペラの世界Ⅱ：日本のオペラ団体（特別講師）

第9回 オペラの世界Ⅲ：日本のオペラ劇場（特別講師）

第10回 バレエの世界：バレエの制作と作品

第11回 ミュージカルの世界Ⅰ：ミュージカルの制作と作品

第12回 ミュージカルの世界Ⅱ：日本のミュージカルカンパニー（外部講師）

第13回 世界のショービジネスⅠ

第14回 世界のショービジネスⅡ

第15回 前期のまとめ・小テスト

第16回 日本の吹奏楽事始め（外部講師）

第17回 日本のオーケストラ事始め（特別講師）

第18回 日本のオーケストラの現在（特別講師）

第19回 日本のコンサートホール（特別講師）

第20回 合唱の世界Ⅰ：日本の合唱事始め

第21回 合唱の世界Ⅱ：日本の合唱の現在（外部講師）

第22回 合唱の世界Ⅲ：オペラと合唱（特別講師）

第23回 音楽とアート（外部講師）

第24回 音楽と芸能

第25回 演出家蜷川幸雄の世界：現代日本を代表する舞台演出家

第26回 「宝塚歌劇団」の歴史と現状

第27回 歌舞伎概論Ⅰ：歌舞伎の歴史と美学 歌舞伎の演目

第28回 歌舞伎概論Ⅱ：歌舞伎の劇場と俳優

第29回 歌舞伎概論Ⅲ：伝統芸能における"芸"の伝承について

履修上の注意

積極的な授業参加。音楽や舞台芸術への興味と関心

授業内小テストとしてレポートの提出が求められる。

一部の授業は、特別講師、外部講師を招いて実施されるため、やむを得ない日程の変更がある場合があるので、掲示などに注意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内で取り扱う芸術家や作品についての予習と復習にそれぞれ60分程度、資料調査、文献調査などを行うこと。

教科書・参考書

毎回授業関連資料配付

科目名－クラス名

音楽芸術運営特別演習①

曜日時限

担当教員

他

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
その他	1～	通年	4		0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

音楽芸術運営専攻の各コースで1年目に行われる主専攻の授業であり、核となるものである。

各自が構想する修士論文のテーマに合わせ、論文執筆に向けた実践力・研究力を高める。

2年次の修士論文執筆を念頭に置き、特定のテーマあるいは複数のテーマを取り上げ、事例検証や論旨展開の考察、発表やディスカッションによる再検討などを中心に進める。

学年末に中間報告会をおこなう。成績評価はこれによりおこなう。

学修成果

研究テーマに沿って、適切な手法を選択できる。

研究に必要な基礎資料を調査・収集し、データを適切に抽出することができる。

データを分析し、それをもとにした考察、及びディスカッションができる。その成果を発表できる。

授業展開と内容

第1回	1. ガイダンス
第2回	2. 研究テーマの設定（1）：現状と課題を検討しながら研究テーマを構想する
第3回	3. 研究テーマの設定（2）：研究テーマを仮に設定する
第4回	4. 調査研究の手法（1）：研究テーマに基づき調査研究の手法を整理する
第5回	5. 調査研究の手法（2）：研究テーマに基づき調査研究の手法を検討する
第6回	6. 調査研究の手法（3）：調査研究の手法を仮に決定する
第7回	7. 基礎資料の調査と収集（1）：文献検索をおこなう
第8回	8. 基礎資料の調査と収集（2）：文献収集をおこなう
第9回	9. 基礎資料の調査と収集（3）：収集した文献を整理・分析する
第10回	10. 調査に基づいた発表とディスカッション（1）：整理した資料をもとに発表し、議論する
第11回	11. 調査に基づいた発表とディスカッション（2）：議論の中から資料の再整理と位置付けを図る
第12回	12. 論理展開の手法（1）：論文の目的を検討する
第13回	13. 論理展開の手法（2）：論文の柱立てを検討する
第14回	14. 論理展開の手法（3）：論文の論旨展開を検討する
第15回	15. まとめ：前期のまとめをおこなう
第16回	1. 前期授業の再確認と後期内容のガイダンス
第17回	2. 事例検証の対象と手法（1）：事例検証の対象を検討する
第18回	3. 事例検証の対象と手法（2）：事例検証の手法を確認する
第19回	4. 事例検証（1）：事例について調査する
第20回	5. 事例検証（2）：事例についての調査結果を整理する
第21回	6. 事例検証（3）：事例について調査結果を分析する
第22回	7. 事例検証（4）：事例について調査・分析結果を検証する
第23回	8. 事例検証に基づく発表とディスカッション（1）：事例検証の結果を報告する
第24回	9. 事例検証に基づく発表とディスカッション（2）：事例検証の結果について議論する
第25回	10. 事例検証に基づく発表とディスカッション（3）：議論の中から事例検証の位置付けを図る
第26回	11. 事例検証に基づく発表とディスカッション（4）：議論の結果から以後の研究計画を検討する
第27回	12. 論理展開の手法（4）：これまでの研究の進捗をもとに、論文の柱立てを再検討する
第28回	13. 論理展開の手法（5）：これまでの研究の進捗をもとに、論文の論旨展開を再検討する
第29回	14. 中間発表に向けた短い論文の執筆：中間発表に向けて短い論文を執筆する

履修上の注意

研究テーマに基づき、資料の収集と整理、事例検証、論文の柱立て、論旨展開の検討、発表とディスカッションを繰り返し、論文の書き方を身に着けるために、主体的に研究をすすめること。

年度末には中間報告会に出席し、研究の進捗状況および今後の研究計画を報告すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

各自のテーマ内容に応じて、各段階で課せられた課題を着実にこなすこと（合計120時間以上）。

研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディスカッションならびに年度末の発表会においておこなう。

教科書・参考書

必要に応じて、授業内で適宜指示する。

科目名－クラス名

音楽芸術運営特別演習①

曜日時限

他

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
その他	1～	通年	4	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				0	40	60	0	0	

教育到達目標と概要

音楽芸術運営専攻の各コースで1年目に行われる、主専攻の授業であり核となるものである。

各自が設定した題材やテーマにより、修士研究を行うことを目的とする。

2年次の公演制作を念頭に置き、とりあげる題材について研究し、企画立案・制作にかかわる準備を行う。

学年末に中間報告会をおこなう。成績評価はこれによりおこなう。

学修成果

制作演習を実施するためのノウハウを修得し、次年度における公演実施に向けての準備ができる。

授業展開と内容

- 第1回 1. 授業ガイダンス
- 第2回 2. 実施計画の策定（1）公演制作に必要な事項
- 第3回 3. 実施計画の策定（2）公演制作に必要な人員・役割
- 第4回 4. 実施計画に沿った研究の実施（1）公演制作の工程・予算などの検討
- 第5回 5. 実施計画に沿った研究の実施（2）台本とはなにか
- 第6回 6. 実施計画に沿った研究の実施（3）台本制作に関する予備的な検討
- 第7回 7. 実施計画に沿った研究の実施（4）台本委嘱に関する予備的な検討
- 第8回 8. 実施計画に沿った研究の実施（5）台本作家の調査
- 第9回 9. 実施計画に沿った研究の実施（6）台本作家の選定
- 第10回 10. 実施計画に沿った研究の実施（7）台本の構想メモ作成
- 第11回 11. 実施計画に沿った研究の実施（8）台本の構想メモ整理
- 第12回 12. 実施計画に沿った研究の実施（9）台本の大枠の検討
- 第13回 13. 実施計画に沿った研究の実施（10）台本の作成（前半）
- 第14回 14. 実施計画に沿った研究の実施（11）台本の作成（後半）
- 第15回 15. 前期のまとめ
- 第16回 1. 前期の評価・反省
- 第17回 2. 実施計画の進行確認
- 第18回 3. 実施計画に沿った研究の実施（1）台本と音楽の関係
- 第19回 4. 授業計画に沿った研究の実施（2）音楽のジャンルの整理
- 第20回 5. 授業計画に沿った研究の実施（3）音楽のジャンルの検討
- 第21回 6. 授業計画に沿った研究の実施（4）楽器編成と声の考察
- 第22回 7. 授業計画に沿った研究の実施（5）音楽制作に関する予備的な検討
- 第23回 8. 授業計画に沿った研究の実施（6）作曲委嘱に関する予備的な検討
- 第24回 9. 授業計画に沿った研究の実施（7）作曲家の調査
- 第25回 10. 授業計画に沿った研究の実施（8）作曲家の選定
- 第26回 11. 授業計画に沿った研究の実施（9）作品の構想メモ作成
- 第27回 12. 授業計画に沿った研究の実施（10）作品の構想メモ整理
- 第28回 13. 授業計画に沿った研究の実施（11）作品制作（前半）
- 第29回 14. 授業計画に沿った研究の実施（12）作品制作（後半）
- 第30回 15. 研究の総括

履修上の注意

新たな作品を創作する制作過程を実地に学ぶ授業である。十分な意欲を持って主体的に研究をすすめる、授業に参加すること。
年度末には中間報告会に出席し、研究の進捗状況および今後の研究計画を報告すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業外での制作に関わる多様な作業が必要になる（合計120時間以上）。様々な人のアドバイスを積極的に受けて公演制作に生かすこと。
研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディスカッションならびに年度末の発表会においておこなう。

教科書・参考書

必要に応じてその都度、指示を与える。

科目名－クラス名

音楽芸術運営特別演習②

曜日時限

他

担当教員

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
その他	2～	通年	4	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

音楽芸術運営専攻各コースで2年目に行われる主専攻の授業であり、核となるものである。
音楽芸術運営特別演習①で立案した公演を実施する。

学修成果

企画・立案した公演を実践することで、音楽芸術公演のプロデューサーの実際の作業を学び、公演制作のよりよい手法を検討することができる。

授業展開と内容

- 第1回 1. 公演実施に向けて～ガイダンス
- 第2回 2. 公演プランニング① キャスティング
- 第3回 3. 公演プランニング② 脚本
- 第4回 4. 公演プランニング③ 演出・照明・音響
- 第5回 5. 公演プランニング④ 衣装・ヘアメイク
- 第6回 6. 公演実施計画① 予算案策定
- 第7回 7. 公演実施計画② 小屋打ち合わせ
- 第8回 8. 公演実施計画③ チケット販売マーケティング
- 第9回 9. 公演実施計画④ プロモーション
- 第10回 10. 公演実施計画⑤ 広報と販売促進
- 第11回 11. 公演準備リハーサル第1回 全体的な反省
- 第12回 12. 公演準備リハーサル第2回 公演制作・準備に関する事項を中心とした反省
- 第13回 13. 公演準備リハーサル第3回 前半部分を中心とした反省
- 第14回 14. 公演準備リハーサル第4回 後半部分を中心とした反省
- 第15回 15. 公演準備リハーサル第5回 今後の準備作業の計画
- 第16回 1. 公演に向けての最終確認① 実施要綱
- 第17回 2. 公演に向けての最終確認② 予算
- 第18回 3. 公演に向けての最終確認③ キャスティング
- 第19回 4. 公演に向けての最終確認④ 演出
- 第20回 5. 公演に向けての最終確認⑤ 照明
- 第21回 6. 公演に向けての最終確認⑥ 音響
- 第22回 7. 公演に向けての最終確認⑦ 衣装・ヘアメイク
- 第23回 8. 公演に向けての最終確認⑧ 本番当日の役割
- 第24回 9. 公演に向けての最終確認⑨ 本番当日の人員配置・手配
- 第25回 10. 公演に向けての最終確認⑩ リハーサル、ゲネプロ、本番のスケジュール
- 第26回 11. リハーサル
- 第27回 12. ゲネプロ
- 第28回 13. 本番
- 第29回 14. 会計収支
- 第30回 15. 成果のまとめ

履修上の注意

学修の成果により評価する。
本番までのプロセスのすべてが重要な学修となる。

公演実現に向けて自ら率先して、全方位に向けて活動すること。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

他の舞台芸術公演をできるだけ多く鑑賞し、流行や新しい手法等について把握するよう努め、それらを制作に活かすこと（合計120時間以上）。
研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディスカッションならびに公演後の総括の際などにおいておこなう。

■ **教科書・参考書**

必要に応じてその都度、指示を与える。

科目名－クラス名

音楽芸術運営特別演習②

曜日時限

担当教員

他

古橋 祐

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
その他	2～	通年	4		0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

音楽芸術運営専攻各コースで2年目に行われる主専攻の授業であり、核となるものである。

各自が設定した研究テーマに即し、事例検証、論文の構成、論旨展開について一層の考察を進めるとともに、発表やディスカッションによりこれを再検討ないし深化させつつ論文執筆に反映し、最終的に論文を完成させる。

学修成果

研究テーマに沿って、適切な手法により、研究を進めることができる。

正しい論理展開をできる。

論文にまとめて発表できる。

授業展開と内容

第1回	1. ガイダンス
第2回	2. 研究テーマ設定（1）：研究テーマを再確認し、さらに掘り下げる
第3回	3. 研究テーマ設定（2）：研究テーマと研究計画を策定する
第4回	4. 修士論文の構成（1）：修士論文の構成について再検討する
第5回	5. 修士論文の構成（2）：修士論文の構成について概略を確定する
第6回	6. 事例検証の対象と手法を再確認する
第7回	7. 事例検証（1）：事例について調査する
第8回	8. 事例検証（2）：事例について整理する
第9回	9. 事例検証（3）：事例について分析する
第10回	10. 事例検証（4）：事例について検証する
第11回	11. 論旨展開の手法（1）：これまでの調査結果を整理する
第12回	12. 論旨展開の手法（2）：論文の構成と論旨展開を検討する
第13回	13. 中間発表準備（1）：中間発表の構成を検討する
第14回	14. 中間発表準備（2）：中間発表の原稿・スライドを作成する
第15回	15. 中間発表準備（3）：中間発表の予行をおこなう
第16回	1. 前期授業の再確認と後記内容のガイダンス
第17回	2. 先行研究の再検証（1）：先行研究を調査する
第18回	3. 先行研究の再検証（2）：先行研究を分析する
第19回	4. 先行研究の再検証（3）：先行研究を整理する
第20回	5. 先行研究の再検証（4）：先行研究の検討結果を執筆する
第21回	6. 論旨展開の再検討（1）：これまでの研究の成果を確認する
第22回	7. 論旨展開の再検討（2）：論旨展開をさらに検討する
第23回	8. 論旨展開の再検討（3）：論旨展開を確定する
第24回	9. 修士論文執筆（1）：本論前半を中心に執筆・推敲する
第25回	10. 修士論文執筆（2）：本論後半を中心に執筆・推敲する
第26回	11. 修士論文執筆（3）：結論を中心に執筆・推敲する
第27回	12. 修士論文執筆（4）：序論を中心に執筆・推敲する
第28回	13. 修士論文執筆（5）：参考文献、注、資料編等を作成する
第29回	14. 修士論文執筆（6）：全体を推敲して完成させる
第30回	15. 口頭試問に向けて：発表の予行をおこなう

履修上の注意

学修の成果により評価する。

研究テーマに基づき、事例検証、論文構成、論旨展開の検討、発表とディスカッションによる再検討を繰り返しながら、修士論文の執筆を進めること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

(新) 各自のテーマ内容に応じて、各段階で課せられた課題を着実にこなし、論文執筆を進めること(合計120時間以上)。

研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディスカッションならびに学位審査の際などにおいておこなう。

教科書・参考書

必要に応じて、授業内で適宜指示する。

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：1441 教員名：古橋 祐

1) 評価結果に対する所見

「芸術文化環境論」の総合満足度は、「そう思う」と「少し思う」を合計すると88.8%であり、一応の評価は受けていると考える。残念ながら「Q7. 授業は学生とのコミュニケーションに努めながら進められている」「Q8. 自分はこの授業の予習・復習をしている」の数値が全体平均よりかなり低いことが気になる。人数が多く直接対話をするのが難しい。そこで、授業では、毎回最後に必ず質疑と感想を提出し、次回授業の冒頭で、必ずそれに答える時間を取るようになっているが、何か違った方法を考える必要があるのかもしれない。「アートマネジメント概論Ⅱ/②」と今年度より担当した「舞台芸術概論」の総合満足度は、「そう思う」と「少し思う」を合計すると100%である。また、自由記述にも同じく、ためになったとの意見が複数あったが、より良くなるよう努力したい。

2) 要望への対応・改善方策

今年度、自由記述に特に指摘事項がなかったが、次年度以降、予習・復習を促すような課題等を課することも考えて行きたい。

3) 今後の課題

履修人数が多い知識先行型の講義について、一人ひとりの学生とのコミュニケーションをどのように取って行くかは、大きな課題である。その方策の一つとしてICTの活用を考えて行きたい。

以 上

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：1441 教員名：古橋 祐

企画制作演習 I 担当教員：柴矢 敏彦/仁科 岡彦/布目 藍人/古橋 祐/吉原 潤

1) 評価結果に対する所見

総合満足度は、「そう思う」と「少し思う」を合計すると 100%である。すべての設問の評価がいずれも「4.00」の評価を得ており、履修者がシラバスの内容を十分に理解した上で、授業展開を踏まえて、学修を深めた結果ではないかと考える。

2) 要望への対応・改善方策

アンケートにおいて「自由記述」がないため、対応・改善方策について特に記すべき事項はないが、今後も高い評価を得られるよう、課題設定を工夫し、授業を実施していきたい。

3) 今後の課題

本科目では、毎年度 8 本前後の課題の提出とプレゼンテーションを課しており、履修者自らが主体的に課題をこなす姿勢が必要とされる。引き続き、科目が目指す目標や授業展開を履修者に十分に理解させて、積極的な態度で授業に臨むよう指導していきたい。

以 上

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：1441 教員名：古橋 祐

企画制作演習Ⅱ・Ⅲ担当教員：岸田生郎/柴矢 敏彦/仁科 岡彦/古橋 祐/吉原 潤

1) 評価結果に対する所見

総合満足度は、「そう思う」と「少し思う」を合計すると100%である。すべての設問の評価は、Q8以外はいずれも「4.00」の評価を得ており、履修者がシラバスの内容を十分に理解した上で、授業展開を踏まえて、学修を深めた結果ではないかと考える。

2) 要望への対応・改善方策

アンケートにおいて「自由記述」がないため、対応・改善方策について特に記すべき事項はないが、今後も高い評価を得られるよう、工夫し、授業を実施していきたい。

3) 今後の課題

今年度は、8本の企画公演を学生の手で実現させた。各公演は必ず、違った課題と直面し、それを解決する能力が求められる。そこには、履修者自らが主体的に課題取り組む姿勢が必要とされる。引き続き、科目が目指す目標や授業展開を履修者に十分に理解させて、積極的な態度で授業に臨むよう指導していきたい。

以 上